2024年8月の総評に代えて　　高橋修宏

つかもうとすればするほど
崩れゆく
灰には灰の輪郭がある　　**まちりこ（埼玉県）**

　これまでも「灰」は、さまざまな象徴やメタファーとなってきた。だが、この作品では、モノとしての「灰」それ自体に目がそそがれている。なるほど、不定形で掴みがたく「崩れゆく／灰」であるけれども、そこにはモノとしての「輪郭」があることに気づかされる。

じてんしゃで
風
をおいこす
夏の日のきみが
せかいのはじまりだった　　**さいう（石川県）**

おそらく、だれかとの出会いが、その人にとって「せかいのはじまり」となることがあるのだろう。恋であれ、友愛であれ、そんな「夏の日のきみ」と出会えたことの喜びが、この作品には溢れているようだ。

ゆうれいの布のあまったとこに
書く
雪だるまは白い影がほしい　　**立花ばとん（東京都）**

　「ゆうれいの布」も「雪だるま」も、どこか儚いイメージを呼び出す。その儚さが、そのまま「あまったとこ」という余剰な場所＝トポスに、「白い影」という、もうひとつの儚い存在を求めてゆく。

靴紐をほどいて死のようなかたち　　杢いう子（佐賀県）

何より「死のようなかたち」という把握が、鮮烈だ。ほどかれた靴紐を見ると、つい想い出してしまいそうなレトリック。

向日葵の折れる形に祈る人　　田崎森太（東京都）

この一句は「祈る人」の比喩でありながら、同時に「向日葵の折れ」た荒涼とした光景を見せてしまう。そう言えば、ウクライナもロシアも、その国を象徴する花は「向日葵」なのだ。

夏の星欠伸の後に涙でて　　吉沢　美香（宮城県）

やはり、こまやかな身体への眼差しを感じさせる一句。どこかユーモラス、「夏の星」との距離感も心地よい。

団栗に満ちた発泡スチロール　　日下部　友奏（群馬県）

もしや「団栗」は、発泡スチロールに包まれているのだろうか。「団栗」と「発泡スチロール」が入れ替わるような気配をたたえた不思議な一句。

稲妻とおくフランス菓子の缶　　有野　水都（東京都）

「稲妻」と「フランス菓子の缶」が、鮮やかな対比を感じさせる一句。ただ、「とおく」の一語は説明的か。

ゆきなさい
ただアラザンが
降る中を　　**桜庭　紀子（和歌山県）**

「アラザン」は、菓子づくりの材料となる銀色の甘い粒。「ゆきなさい」という強い命令形でありながら、どこか童話やファンタジーのワンシーンを感じさせる一作。

子規と背がおなじの君の草団子　　**金光　舞（埼玉県）**

同じく、菓子つながりの一句。何より「草団子」が、子規のイメージを彷彿とさせる。また、「子規と背がおなじ君」という具体的な把握も効いている。

たった二秒の雨の動画を
これからも
くりかえしくりかえし見るだろう　　**ひろみ（京都府）**

この作中主体にとって、「たった二秒の雨の動画」とは、かけがえのないシーンなのだろう。別離か、後悔か、あるいは祝福か…。ときに、わたしたちも「たった二秒」によって、その後の人生と呼べるものを決められていくのかもしれないのだから。

東洋を水槽にいれ飼っている　　**牛田　悠貴（東京都）**

いったい「東洋」とは、何なのだろう。「東洋」を象徴する生きものなどを想像させながらも、それ以上は不明なままだ。その謎が明かされぬまま、読者はさまざまな想像をさせられるような一句。